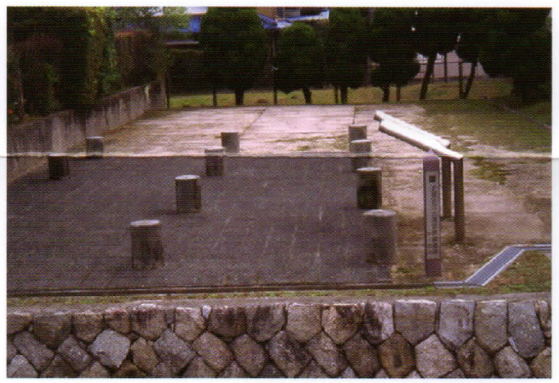
滋賀文化懇話会　第10回市民文化講座

天智朝と大津宮遷都の歴史的意義

小笠原好彦　滋賀大学名誉教授

日 時　7月27日（土）午後2時 ～ 4時半　（午後1時半受付）
場 所　JR大津駅前、日本生命ビル内4F　滋賀大学大津サテライトプラザ
どなたでも参加自由、事前申し込み不要（座席定員60名）資料代300円

663年、朝鮮半島で白村江の戦いに敗れると、日本は国家として未熟さを露呈し、また唐・新羅軍の侵攻に備えることが必要になりました。天智天皇は対馬・筑紫を中心に、西国各所に朝鮮式山城を設け、さらに都を飛鳥から近江に遷し、律令国家の建設に着手せざるをえなくなりました。発掘された大津宮の実態・問題と大津京の有無にも言及します。（小笠原記）



大津宮の正殿跡：西側半分は道路下。この正殿跡は桁行7間に復元されており、なお検討の余地があります。

岡山県鬼ノ城跡：白村江の戦い後、吉備に造られた朝鮮式山城です。

講師の紹介：

1941年青森市生まれ。考古学・日本史学者、東北大学大学院文学研究科修士課程修了。奈良国立文化財研究所を経て、1979年滋賀大学教育学部に赴任、2007年定年退職。滋賀大学名誉教授。文学博士。主な著書に、『聖武天皇と紫香楽宮の時代』新日本新書2002年、『日本古代寺院造営氏族の研究』東京堂出版、2005年、『聖武天皇が造った都 難波宮・恭仁宮・紫香楽宮』吉川弘文館、2012年、『古代豪族葛城氏と大古墳』吉川弘文館、2017年など。

主催　滋賀文化懇話会（代表　成瀬龍夫／滋賀大学元学長）
連絡先（事務局）　０８０−５３０２−４０１９（浪江）